

Title	自己評価についての一考察(2) : 幼児期の自己認識の発達について
Author(s)	梶原, 佳子
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1996, 22, p. 399-410
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8983
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

自己評価についての一考察（2）

—幼児期の自己認識の発達について—

梶原佳子

目次

はじめに

1. 自己評価の発達
2. 自己認知と他者認知の発達

おわりに

自己評価についての一考察（2）

—幼児期の自己認識の発達について—

梶原 佳子

はじめに

自己評価とは、自分自身のさまざまな側面の認知についての価値付けや感情や評価のことである。(梶原、1994) 発達の幼児が自己評価を行うようになるのは4歳ごろからである。また、自己概念については、断片的ではあるが3歳ごろから形成されることが明らかになっている。つまり幼児が自分自身を対象化してとらえることができるようになるのは3、4歳ごろからである。そして、子どもの認知能力が発達するに従って、自己評価は現実を反映した、より正確なものとなる。また、自分と他者を比較して自己評価を行うこともできるようになる。本稿では、子どもの自己評価の発達の過程について考察していく。

なお、幼児の自己の発達の研究については、1歳から2歳にかけての自己認識の発達や、5歳から6歳にかけてのセルフモニタリングの成立の研究の蓄積は多いが、その合間の3歳から4歳の時期を対象にした研究は少ない。そのため本稿では自己評価だけでなく、自己認識の発達の過程も含めて検討を行う。

1. 自己評価の発達

幼児の自己評価はどのように発達するのだろうか。幼児の自己評価や自己概念の研究から、幼児が自分自身をどのようにとらえているのか、それがどのように変化するのかをみていく。

(1) 自己評価の発達

HarterとPike(1984)は、4歳から7歳の子どもを対象にコンピテンスを測定し、それぞれの年代の子どもの状況に合わせた領域であれば、4歳でも自己評価を行うことが可能だとしている。Harterらは子どもに絵を用いて、コンピテンス(認知的コンピテンスと身体的コンピテンス)と社会的受容(母親からの受容と友人からの受容)を尋ねた。具体的にはパズル解き、数唱、色の名前などについて尋ねる幼児用と、読み書き計算を中心とした小学校低学年用があ

り、さらにそれぞれに男子用女子用がある。

しかし、この方法で求められた自己評価はあくまで、子どもによって知覚された (perceived) ものである。教師評定値との相関係数はコンピテンスについては0.3台、社会的受容については0.06とあまり高いものとはいえない。その後の追試でも、コンピテンスについて0.2前後の相関係数(金城・前原, 1991; Gullo & Ambrose, 1987; 桜井・杉原, 1985)であった。

つまり、4歳から7歳ごろまでの子どもは自己評価を行っていても、それは現実をあまり反映していない。子どもは自分の能力を楽天的に高く評価する傾向があり、年少児ほどその傾向は強い。Hansford & Hattie(1982)が自己評価と現実の達成度との関係について行った文献調査でも、学齢期前の幼児の自己評価と現実の達成度の関連は非常に低いことを明らかにしている。

正確な自己評価を行うことが困難であることの理由について、Harterら(1984)は、幼児が「こうありたい」という理想の自己イメージと現実の自己イメージとの区別が明確でないためだとしている。金城ら(1991)は理由として、年少児の認知能力に原因を求めている。この年齢の子どもは、能力と努力、自己と他者、理想と現実などの両面的な関係を同時に関係づけることができない。Piagetのいう前操作期段階にあるため脱自己中心化がなされていないため、多様な側面を同時に理解することができないのである。

(2) 社会的比較と自己評価

社会的比較理論からも認知能力の発達が発達自己評価に影響を与えることが明らかになっている。

自己評価は何らかの基準に基づいて行われる。その際に他者を基準とした比較、つまり社会的比較による自己評価が行われるのは、8、9歳になってからである。(Boggiano et al., 1979; Ruble et al., 1980; Ruble et al., 1976; 高田, 1992) 8、9歳以前ではたとえ他者と自己の比較を行っても、得られた情報を分析し推論する操作的認知能力が不十分なため、比較の結果を自己評価に関連させることができないからである。

また、Harter(1982)は、全般的な自己価値についてのコンピテンスを判断できるのは、8歳以降であるとしている。つまり、現実に応じた妥当な自己評価が可能になるのは8、9歳ごろであり、そのころ個別の自己評価を統合した全般的な自尊感情が成立するといえる。

評価ということ自体が、何かと何かを比較することで成り立つ以上、2つ以上の事柄を同時に処理できなければ、評価が不完全なものになるのは致し方ない。しかし、断片的ではあるが、幼児は3、4歳ごろから自己について何らかの認識をもっていることが明らかになっている。

(3) 自己概念の発達

言語的なコミュニケーション能力が問題となって、4歳以前の幼児を対象とした自己評価や

自己概念の研究は少ない。しかし、Kellerら(1978)は、幼児は3歳ごろから自分自身の特徴を言語を用いて述べることを明らかにしている。

Kellerら(1978)は、3歳、4歳、5歳の幼児に、「○○ちゃんは・・・」という質問をして、その反応の内容を分析している。それによれば、まず3歳から4歳、5歳と年齢を経るに従って、自分自身の行為に関することがらや、他者との関係についての言及が増加している。それに対して、持ち物や名前についての言及は減少する。また、行為と身体的特徴について、どちらが自分によくあてはまるかを聞いたところ、身体的特徴を選択する割合は低かった。

幼児は発達の中で、自分自身を持ち物や名前や身体的特徴など具体的な特徴から、行為や他者との関係などより抽象的な特徴から理解していくことがわかる。対人関係の広がりや、認知機能の発達に伴って、幼児の自己概念は3歳ごろには存在しているといっていよう。

都筑(1981)は、4歳、5歳、6歳の幼児に、いくつかの年齢を提示し、「なれるとしたら何歳になりたいか、あるいはなりたくないか」ということとその理由もあわせて尋ね、幼児が自分自身を現在、過去、未来の時間の流れの中にどのように位置づけているかを調査している。その結果、4歳児では、なりたくない理由を明確にいうことは困難であった。言語的な表現能力が年少児で劣っていることも、理由として挙げられるかもしれない。しかし、4歳でも「きのう」「きょう」「あした」などの時間の流れは理解している(都築、1993)。過去の自分、現在の自分、未来の自分を想像したり、時間軸上に自己を位置づけることは、5、6歳になってから可能であると考えられる。

自分自身を時間的連続性の中で捉えることは、発達は物語をつくることと関連している(梶原、1993b)が、内田(1989)は一連の物語産出の過程の研究から、時間的展望と自己の認知との関係について次のように述べている。時間的展望は、1歳前後より現在から過去に向かって広がり、因果関係の理解や象徴機能が発達を促す。しかし、5歳後半になって、時間的展望が未来を含むようになって、自己認知は質的に変化する。未来の視点から現在を見て、自己の行動についての予測や見通しをたてるプランニングを行うことができるようになる。このことにより自分自身の行為を意識化しコントロールするセルフモニタリングを行うようになり、また、自分の行動を他者に合わせて変えることが可能になる。未来についての時間的展望は、目標や動機づけとして作用するとともに、現在の自己をコントロールする機能ももつといえる。

以上から、現実を反映した自己評価は8、9歳ごろにならなければ行えないが、幼児は3、4歳ごろからすでに自分自身についてなんらかのイメージを持ち、それを言語化できることが明らかになった。これは自己の対象化のはじまりである。このような自己の対象化は単独で行われるのではない。2歳ごろに行われる自己の鏡像認知の成立は、自己の身体が他者の身体同様に「見られる」ものであり、他者のまなざしが自己のまなざし同様に「見る」はたらきを持つものとして認識されることが必要であった。(梶原、1993a)つまり、自己の対象化の過程では必ずそこに自己に対峙するものとしての他者の存在がある。自己認識と他者認識は表裏一体

をなしており、それは自己と他者の身体や心的な世界が基本的には一対一で対応し、相互互換的であることを認識することで成立しているのである。

2. 自己認知と他者認知の発達

幼児はいつごろから自分や他者には外から見えない心というものがあることを理解するようになるのだろうか。自己と他者の心的世界の存在の認識はどのように発達するのだろうか。

(1) 心的世界の気づき

幼児は2歳ごろから自己と他者の心的世界について言及しはじめ、3歳ごろには心的世界が物理的世界とは違う性質を持つことを理解している。

Brethertonら(1982)は、幼児の使うことばを分析して、2歳ごろから、感情(happyやsadなど)や思考(knowやthink)など自分の内的な状態をあらわすことばの頻度が増えることを明らかにしている。また、Dunnら(1987)は家庭での幼児と家族の会話を分析して、幼児は自分だけでなく他者の気持ちや感情についても言及を行っており、幼児は他者にも心的な世界が存在することに気づいているらしいことを明らかにしている。

Wellmanら(1986)は、3歳の幼児に本物のクッキーと頭の中の想像上のクッキーの違いを尋ね、多くの幼児が、見たり触ったりすることができるのは現実に存在しているものだけであり、心的な世界は直接に見たり触れたりすることができないと理解していることを示している。

しかし、心的な世界の性質について理解していても、自己と他者にそれぞれ心的な世界が別々に存在することを理解するのは3歳児には困難である。たとえば、3歳児は自分の目の前に置かれた物体について、もし他者が違う方向からみたら、何が見えて何が見えないのかを推測できる。しかし、それが他者にどのように見えているのかを推測することはできない。

(Flavell, 1988)

そして、幼児は、自己と他者の物理的な視点の違いを認識しても、すぐには自己と他者の心的な世界での違いを認識することができない。他者の思考の内容や道筋を推測することはさらに難しい。

(2) 自己と他者の心的世界の区別の発達

Selman(1971)は、自己と他者の心的世界の理解がどのように発達するかを、自己と他者の区別の発達という面から捉えている。視点取得と自己と他者の心的世界の理解について、4歳から6歳の幼児を対象にした調査の結果は次のようである。まず、これらの幼児は、同じ一つの対象が、見る位置によって見えかたが異なるという、視覚的な視点取得については理解していた。しかし、自己と他者の心的世界の区別については理解が異なり、次のような4つのレベ

ルがみられた。

- A. 自他の心的世界の区別はできない。他者の考えは自分の考えと同じだと思っている。
- B. 自己と他者の心的世界の区別ができる。心的世界は身体同様、自己と他者で全く別のものである。他者の考えを推測することは不可能である。
- C. 自他の心的世界を区別している。しかし、その思考の内容や方法は自己も他者も同じなので、他者の考えは推測できる。
- D. 自他の心的世界を区別している。その思考の内容や方法も異なるので他者の考えを推測することはできない。

年齢との対応については、4歳児ではAレベルのものが多かったが、6歳児ではほとんどがDレベルに移行していた。

以上から、自他の心的世界の区別の発達は、次のような段階を経ていることが示される。

- ①自己と他者に心的な世界が存在することを理解する段階。
- ②自己と他者の心的世界は、自己と他者の身体が違うように、別々のものであるということを理解する段階。
- ③自己と他者の心的世界が別々のものではあっても、機能的・構造的には同じということを理解する段階。
- ④自己と他者で心的世界の機能や構造は同じでも内容は異なっており、思考や感情の過程が異なっていることを理解する段階。

自己と他者の心的世界を区別し、その内容の違いを正しく理解することは6歳ごろに可能になるといえるだろう。

ところで、他者の心的世界の内容の理解の発達について、状況への依存と独立という観点から検討した一連の研究がある。自分は真実を知っているのに、他者はそのことを知らない場合、他者の持つ誤った信念を幼児はどのように認識しているかを調べた実験である。

(3) 他者の心的世界の内容の理解の発達

Wimmerら(1983)は3歳から9歳の子どもを対象に、人形劇を用いて、次のような状況を見せて質問した。「Mはお母さんが買ったチョコレートを青い戸棚にしまって遊びに出かけました。その後、お母さんは青い戸棚からチョコレートを出して食べ、残りを緑の戸棚にしまって出かけてしまいました。遊びからかえってきたMはどこを探すでしょうか。」この実験のポイントは、観察者である被験児は真実(チョコレートは緑の戸棚にある)を知っているが、Mは誤った信念(チョコレートは青の戸棚にある)を持っている、という2つの事態を理解しな

くてはならないことである。結果は、3歳児で正しく答えることができたものはいなかったが、4、5歳児では半数近くが正答し、6歳から9歳ではほぼ全員が正答していた。

木下(1991)は、3歳、4歳、5歳の幼児を対象に、Wimmerら(1983)やHogrefeら(1986)の実験の追試を行って、彼らと同様の結果を得た上で、次のことを明らかにしている。まず、被験児全員が正答したか誤答したかに関わりなく、主人公が緑ではなく青い箱にしまったことを記憶していた。つまり、誤答の原因は、あくまで同時に自己と他者の心的世界の認識を勘案することができないという、認知上の混乱によることを明らかにしている。

しかし、Flavell(1988)の他者の視点取得の理解と同様に、ある事態について自己と他者の認識が異なっているかを推測することは、その事態を他者がどのように認識しているかを推測することより、容易である。(久保, 1992)

Pillow(1989)は、3歳から5歳の幼児を対象に、「箱の中身を入れ替えたの知らない友だちは、その箱にながら入っているか知っていますか」という質問をしたところ、3歳児でも4割が正しく答えられた。しかし、「友だちは箱の中身を何だと思っているでしょう」という質問には、ほとんどの3歳児と4歳児の過半数が答えられなかった。5歳児では8割以上が両方の質問に正答していた。つまり、3、4歳児にとっては、自分の持つ表象と異なる表象を構築することが困難であることがわかる。(久保, 1992)

(4) 状況に依存した他者理解

しかし、他者の心的世界の理解は年齢にしたがって均一になされるのではなく、かなり状況に依存して行われており、領域特殊性が見られる。

Flavell(1988)は、3歳でも、家族などよく知っている他者の好き嫌いなどは知っており、さらにそれが自分自身の好き嫌いと同じか異なっているかについても理解していることを明らかにしている。つまり幼児は他者の心的世界を理解するのに、状況からかなり手がかりを得ているのである。

また、先述の木下(1991)は第2実験として、4、5歳の幼児を対象に、Wimmerらの人形劇の結末を変え予期できない状況として提示し、被験児がそれをどう理由づけるかを尋ねた。具体的には、最後に主人公が現れ、青い箱ではなく緑の箱を探して対象を得る、というもので、被験児の予想を裏切る結末になっていた。結果は、被験児の予測と主人公の行動がくいちがう理由について、5歳児は4歳児に比べて、主人公が青い箱ではなく緑の箱を探したことに、「ドアのすきまからこっそり見ていた」などと理由づける割合が高かった。

木下(1991)の結論から、次のことがいえる。4歳児では、自己と他者の心的世界を区別できるが、まだかなり状況依存的である。しかし、5歳児では状況から独立して、事象の背後にある論理を考察し、それを意識化できるようになる。4歳から5歳での変化について考えると、子どもは日常生活の中で、認知能力がじゅうぶん発達していないため、予測と現実が一致しないような矛盾を経験することがある。しかし、そのことがかえって事象についての認識を深め、

ものごとの因果関係や論理についての理解を導くのである。

おわりに

本稿では、自己評価の発達と、自己と他者の心的世界の認識の発達を検討してきた。最後に、幼児の自己概念や自己評価の発達の研究についての今後の課題をいくつか取り上げる。

第一に、自己概念・自己評価の質的な内容の検討が挙げられる。幼児は一般に自分の能力について楽天的に高く自己評価を行っている。しかし、なかには否定的な自己評価を行っているものがいた。(金城・前原, 1991) 幼児期の自己評価にも個人差があることを示しており、非常に興味深い事項であるといえよう。また、4歳ごろの自己評価の内容は5、6歳ごろの自己評価に比べて否定的であるという報告がある。(松田, 1983) 4歳前後は自他の心的世界の区別の認識が始まり、自己の内面へと関心が向けられる時期であり、自己についての意識がそれまでの身体的な自己認知からメタ認知へと変化する過渡的な状態にある。自己評価の一時的な低下は、このような自己についての意識の変化によって引き起こされているとも考えられる。これからは、幼児の自己の発達の認知的な側面だけでなく、質的・情緒的な側面も検討していくことが望まれる。

第二に、社会的な認識の発達と自己の発達についての研究がほとんどないことが挙げられる。自己認識と他者認識が表裏一体であることは述べた。この他者とは、幼児をとりまく生活空間の拡大ともなって、養育者、友人などの特定の他者から一般化された他者へ、さらには自己の所属する集団や社会へと拡大し、自己を対象化する視点が変化していく。これからは、自己は閉じたシステムではなく、外の世界と関わり合いながら発達していくものであることを示す研究が必要になるだろう。

<引用文献>

- Boggano, A. & Ruble, D. 1979 Competence and the overjustification effect: A developmental study. *Child Development*, 37, 1462-1468.
- Bretherton, I. & Beeghly, M. 1982 Talking about internal states: The acquisition of an explicit theory of mind, *Developmental Psychology*, 18, 906-921.
- Dunn, J., Bretherton, I. & Munn, P. 1987 Conversations about feeling states between mothers and their young children, *Developmental Psychology*, 23, 132-139.
- Flavell, J. H. 1988 The development of children's knowledge about the mind: From cognitive connections to mental representations, In J. W. Astington, P. L. Harris and D. R. Olson (eds.), *Developing theories of mind*, 244-270, Cambridge University Press.
- Gullo, D. F. & Ambrose, R. P. 1987 Perceived competence and social acceptance in kindergarten: Its relationship to academic performance. *Journal of Educational Research*, 81, 28-32.
- Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-93.

- Harter, S. & Pike, R. 1984 The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development*, 55, 1969-1982.
- Hansford, B. C. & Hattie, J. A. 1982 The relationship between self and achievement / performance measures. *Review of Educational research*, 52, 123-142.
- Hogrefe, G. J., Wimmer, H. & Perner, J. 1986 Ignorance versus false belief: A developmental lag in attribution of epistemic states. *Child Development*, 57, 567-582.
- 金城洋子・前原武子 1991 幼児における自己能力評価－認知能力および教師評定との関係－ *教育心理学研究*, 39, 400-408.
- 梶原佳子 1993a まなざしを考える－他者からのまなざしと自己へのまなざしと 梶田毅一編 自己という意識. 現代のエスプリ307号, 63-71, 至文堂.
- 梶原佳子 1993b 心理学的な時間について－現在を創出する自己－ *大阪大学教育心理学年報*, 2, 7-10.
- 梶原佳子 1994 自己評価の意識の構造的検討－女子短大生の場合 人間性心理学研究, 12, 87-94.
- 久保ゆかり 1992 他者理解と共感性 木下芳子編 対人関係と社会性の発達 新児童心理学講座第8巻, 173-215. 金子書房.
- Keller, A., Ford, L. H. Jr. & Meacham, J. A. 1978 Dimensions of self-concept in preschool children. *Developmental Psychology*, 14, 483-489.
- 木下孝司 1991 幼児における他者の認識内容の理解－他者の「誤った信念」と「認識内容の変化」の理解を中心に *教育心理学研究*, 39, 47-56.
- 松田惺 1983 自己意識 三宅和夫他編 児童心理学ハンドブック, 640-664. 金子書房.
- Pillow, B. H. 1989 Early understanding of perception as a arouse of knowledge. *Journal of Experimental Child Psychology*, 47, 116-129.
- Ruble, D., Boggiano, A., Feldman, N. & Loebler, J. 1980 A developmental analysis of the role of social comparison in self-evaluation. *Developmental Psychology*, 16, 105-115.
- Ruble, D., Persons, J. & Ross, J. 1976 Self-evaluative responses of their own and their classmates' ability. *Journal of Educational Psychology*, 73, 404-410.
- 桜井茂夫・杉原一昭 1985 幼児の有能感と社会的受容感の測定 *教育心理学研究*, 33, 237-242.
- Selman, R. 1971 Taking another's perspective: role-taking development in early childhood. *Child Development*, 42, 1721-1734.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社.
- 都築学 1981 幼児期の自己意識の発達 *教育心理学研究*, 29, 70-74.
- 都築学 1993 時間的展望の発達 丸野俊一編 現代のエスプリ314号, 47-54, 至文堂.
- 内田伸子 1989 幼児心理学への招待－子どもの世界づくり－ *新心理学ライブラリ2* サイエンス社.
- Wellman, H. M. 1985 The child's theory of mind: The development of cognition. In S. R. Yussen (Ed.), *The growth of refrection in children*, Academic press.
- Wimmer, H. & Perner, J. 1983 Beliefs about beliefs:Representation and constructing function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.
- 内田伸子 1989 幼児心理学への招待－子どもの世界づくり－ *新心理学ライブラリ2* サイエンス社.

<参考文献>

- 久保ゆかり 1992 他者理解と共感性 木下芳子編 対人関係と社会性の発達 新児童心理学講座第8巻, 173-215. 金子書房.
- 内田伸子 1989 幼児心理学への招待—子どもの世界づくり— 新心理学ライブラリ2 サイエンス社.

A STUDY ON SELF-EVALUATION(2)

Yoshiko KAJIWARA

The purpose of the present study is to examine the development of young children' self-evaluation(SE). Children can evaluate themselves from the age of 4. Social comparison theory indicates that young children don't use social comparison as they evaluate themselves under the age of 8. High scores of young children' SE are mainly explained in terms of pre-operational egocentric nature.

The relation between the role-taking levels and chronological age implies that the conceptual role-taking is an age-related social-cognitive skill and also indicates the possible existence of an ontogenetic sequence of role-taking stages.

The thoery of mind shows that taking another's perspective is essential for cognition of both the self - mind and others'.